

「空しさを味わう」

コヘレトの言葉 11:6-12:2

I 導入部

みなさん、おはようございます。メッセージの前にお祈りをしたいと思います。

祈り

愛する天のお父様。あなたの尊い御名をあがめ、心より賛美いたします。

本日、このように、この場所で、ここにいらっしゃる、本当に尊い、あなたが愛しておられるお一人ひとりとともに、礼拝を捧げられていることを、心より感謝します。

私たちはあなたが必要です。あなたの助けなしでは、あなたの愛なしでは無理です。だからこそ、このように礼拝を捧げられることを、心より感謝致します。目には見えませんが、あなたがここにいらっしゃることを信じ、あなたに期待をします。

ただいま、聖書が開かれました。あなたが、聖霊さまにあって、導いて、書かせてくださった、このいのちのことば、神のことば、あなたの思いを、私たちが本当に悟ることができますように。どうか、私たちの心を照らしてください。

罪深い者、弱き者が、取るに足らない者が、あなたと教会に立てられたゆえに語ります。準備の中であなたが助けてくださったことを信じます。どうか今も、助けてください。憐れんでください。あなたの心を、あなたが教会に語りたいことを、忠実に語るすることができますように。

今日も江上先生は、浦和教会でご奉仕にあたっておられます。どうか、先生の上に、そして浦和教会の礼拝の上にあなたの助けがありますように。

また、今日ここに来たくても、来ることができなかった兄弟姉妹もおられます。あなたがその場所にあつて、あなたとの深い交わりを与えてくださいますように。

あなたに、ただあなたに期待し、また感謝をして、私たちの主イエス・キリストのお名前を通して、この祈りをお捧げいたします。アーメン。

若者と言えば！

本日は、第一礼拝では、ユースが賛美を導いてくれています。なので、ぜひ「若者と言えば！」という箇所から語りたいと考え、先ほど読んでいただいた箇所を選ばせていただきました。

「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。」他の訳ですと、「あなたの若い日にあなたの造り主を覚えよ」となっていますが、このことばはキリスト教会のなかでは非常に有名な箇所です。

本日は先ほど読んでいただいた箇所から、三つのポイントで、「空しさを味わう」というテーマでメッセージを語って参りたいと思います。

II 本論部

一. 空しさと向き合う聖書

一つ目のことは、聖書は、世界のむなしさに対して、逃げることなくきちんと向き合っているのだということです。大切なことなのでもう一度言います。聖書は、世界のむなしさに対して、逃げることなくきちんと向き合っている。

本日開かれましたコヘレトの言葉は、他の聖書の訳ですと伝道の書あるいは伝道者の書となっています。「コヘレト」というヘブライ語は、そのようにも訳せる言葉でして、伝統的にはイスラエルの王さまであったソロモンが書いたと言われています。

そして、おそらくこの書物を読んだことのある方は同意していただけるかと思いますが、このコヘレトの言葉という書物は、聖書のなかでもかなり変わった書物です。

まずそのスタートが面白い。これも有名なことばではあるのですが、次のようなことばでコヘレトの言葉が始まります。開かなくて結構です。

1:2 なんという空しさ、なんという空しさ、すべては空しい。

本日の箇所でも、11:8で「何が来ようとすべて空しい」。11:10では「若さも青春も空しい」とあります。コヘレトは、その書物のなかで、繰り返し繰り返し世界の「空しさ」を語っていくのです。

みなさんは毎日のなかで「空しさ」を覚えるときはあるでしょうか。「ああ、むなしいなあ」と感じる時はあるでしょうか。

私はこの教会のユースパスターとして働いていると同時に、KGK キリスト者学生会という大学生のキリスト教宣教団体で働かせていただいています。

基本的には、めっちゃ楽しいです。先週もいくつかの学校を訪れたり、学生たちにメッセージをしたりして、本当に素晴らしいときをもつことができました。

しかし、当然のことですが、時に「疲れ」を覚えるときもあります。しんどいときがある。もちろん、「やり切った〜」という、心地良い疲れの時もありますが、こう思ってしまう時もあるんです。

「空しい...こんなことをやって何の意味があんねん!」。ちょっと関西弁が出てしまいました。が、「こんなん何の意味があんねん」と思ってしまうことが、もちろんいつもではありませんが、ある。働くことに「空しさ」を覚えることがあるんですね。

みなさんはいかがでしょう。勉強や、部活や、仕事や、家事や育児など、普段の生活のなかで、この世界で生きるなか、「空しさ」を覚えることはあるでしょうか。

「空しさ」を覚えるとき、ありうる反応が二つあります。二つあると思います。

一つは、「まあ人生ってこんなもんだよな」。そう言って、あきらめてしまうことです。「まあ適当にやるかな」と言って、深く考えず、なんとなく、とりあえず流されて生きていくことです。

もう一つは、そのような空しさと向き合い、真剣に見つめ、人生とは何かということを真剣に問い抜いていく生き方です。

コヘレトは、この書物のなかで、人生の悲しみや、失望、深い孤独、この世界を覆う不正や抑圧を、真剣に見つめ、考えて考えて考え抜いていったプロセスを描いています。彼は、目の前の現実を真剣に見つめました。それを問い続けました。彼は簡単に答えを出さなかった。現実失望しながらも、悲しみを抱きながらも、現実をじっと見つめた。この世界にある空しさに向き合い、それを味わい、問い続けたのです。彼は空しさから逃げなかった。

一つ目のポイントとして、コヘレトは、聖書は、世界の空しさに対して、逃げることなくきちんと向き合っている。そのことを、ともに確認しました。

二. だからこそ、輝く小さな喜びがある

続いて考えたい二つ目のことは、この世界には空しさがある。しかし、そのなかでこそ輝く小さな喜びがあるということです。空しさのなかでこそ輝く小さな喜びがある。これが二つ目のポイントです。

コヘレトは「この世界は空しい」と語っています。でも興味深いのは、だからこそ、彼が語るのは、今、与えられている喜びを全力で喜べというメッセージなのです。

11:7をご覧ください。「**光は快く、太陽を見るのは楽しい。**」ここで言う光や太陽は人生のなかで与える暖かなもの、喜ばしいものの象徴です。確かに、人生には、あたたかなもの、喜ばしいものも与えられています。だから、あなたには、どんなあたたかなもの、喜ばしいものが与えられているでしょうか。

11:8「長生きし、喜びに満ちているときにも／暗い日々も多くあろうことを忘れないように。何が来ようとすべて空しい。」

ここでも、暗い日々が必ずやってくるから、楽しみはずっとは続かないと言っています。しかし、そのなかにも、喜びは、確かにある。いやむしろ、暗い日々もあるからからこそ、喜びの意味が際立つのではないのではないか。

11:9「若者よ、お前の若さを喜ぶがよい。青年時代を楽しく過ごせ。心にかなう道を、目に映るところに従って行け。知っておくがよい／神はそれらすべてについて／お前を裁きの座に連れて行かれると。」

この世界は空しく、問題があります。この世界における喜びはいつまでも続くわけではありません。若さも有限です。人生にはやがて秋が、冬が訪れます。苦しみや病だっけいつ襲ってくるかは分かりません。その現実には心に留めなければならない。

でも、コヘレトが語るの、だからこそ、今与えられている若さ、あるいは日常の小さな喜びを、存分に喜ぼうではないか。それはいつまでも続くものではない。苦しみの日がやがてやって来る。でも、だからこそ、今ある小さな喜びを、本当に感謝し、喜ぶことができるのではないかと、語っている。

私は、クリスチャンの家庭に生まれましたが、ずっとキリスト教のことを誤解していました。キリスト教という宗教は、「我慢しなくてはいけない宗教」だと思っていました。

もちろんそう教えられたわけではなく、勝手に勘違いしていた部分が大きいのですが、そうじゃないということ、大学生になって、初めて気づいた。

聖書は、この世界で、芸術や、音楽や、勉強や、労働や、あるいは食べることやスポーツや、人との関わりを、神さまが与えてくださったものとして、楽しむということを根本的には肯定している。それらは根本的には良いものである。楽しめとコヘレトも語っているのです。

私はラーメンが大好きで、たまにユースたちと行くのですが、ラーメンを食べながら、賛美しています。もちろん忘れてしまうこともありますが、「うわ～このラーメンうまっ！神さまが造られたものは素晴らしい！」と思って食べたいと思っています。

もちろん、「罪」、つまり、神が悲しむようなことをして、楽しんでほしくない。「さばき」を覚えなければならない。でもそうでなければ、賛美しつつ、神が造られたこの世界の豊かさを味わって、楽しんで良い、いや楽しみなさいと語られている。

私は、ずっと今言ったようなテーマを神様と切り離して考えていました。神様と何の関係もないものとして、勉強や音楽やスポーツをとらえてきた。でも、それらは、神がふさわしく楽しむように、そしてふさわしくこの世界をより豊かで、より良い世界としていくために、神が託してくださった賜物、プレゼントなのだという聖書のメッセージを、この箇所は指し示しています。そのように、あなたの日々の生活をとらえているのでしょうか。

コヘレトが語っているのは、むなしさのなかでこそ輝く小さな喜びがある。みなさんの日々の生活のなかで、どのような喜びを、神は与えてくださっているのでしょうか。私たちはそれを喜んでいのでしょうか。

二つ目のポイントは、空しさのなかでこそ輝く小さな喜びがあるということです。

三. 創造主を心に留める

私たちは一つ目に、聖書はむなしさという問題に逃げずに向き合っているということを確認しました。二つ目に、でもそのなかでこそ輝く小さな喜びがあるということを確認しました。

最後に、三つ目のこととして私たちが受け取りたいのは、そのような流れを踏まえたコヘレトの結論です。12:1～2です。

12:1 青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。苦しみの日々が来ないうちに。「年を重ねることに喜びはない」と／言う年齢にならないうちに。

12:2 太陽が闇に変わらないうちに。月や星の光がうせないうちに。雨の後にまた雲が戻って来ないうちに。

この世界には空しさがある。喜びはいつまでも続くわけではなく、若さも有限で、苦しみや病、またここに書かれているように、災害も、いつ襲ってくるかは分かりません。そのことに向き合い、それ問い続けたコヘレトが最後に至った結論こそが、「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。」という命令でした。

最初に申し上げた通り、これは別の訳の方が有名です。「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。」

「あなたの若い日に」とあります。私は幼いころから、聖書の話聞いて育ちました。両親が信仰者としての模範を示してくれ、教会にいるたくさんの大人たちが、私を愛してくださることを通して、神の愛を頭だけではなく、体験しました。この教会でも、子どもたちやユースがそのように愛されていることに本当に感謝しています。

幼いころから、最も若い日から、創造主なる神さまを知ることができたことは、その後、空しさを、悲しみを覚える人生を歩む上で本当に幸いなことでした。今日ここにも多くの若い方がいます。子どもたち、中高生、そしてユース。本当に感謝ですね。若い日に創造者を知ることができるのは本当に最高です。

今日は、ユースが、特別に賛美を導いてくださいましたが、本当に素晴らしかった。若い彼らを見ているだけで、彼らが教会にいるということに、本当に感動します。若い若いって言っていますが、別に僕も若いですが（笑）

でも、この御言葉は、実は若い方だけへのメッセージではないんですね。もちろん、この教会にいる方々は、総じてお若いというか、年齢不詳の方が多すぎるので、そういう意味では皆さんに当てはまるのですが、それと同時に覚えたいことは、「あなたの若い日に」とは、それは「今」のことでもあるのだということです。「あなたの若い日」とは今、この瞬間である。確かに、今から一秒でも時間が進むと、それだけあなたは老いますよね。その意味では、「あなたの若い日」とは、今この瞬間のことでもある。この御言葉は、今、創造主を覚えようという招きでもある。

そして、ここで言う「覚える」というのは、ただ認識する、記憶するという意味ではありません。新共同訳では「心に留めよ」となっていますが、もっと深く心に刻むという意味です。

私は、クリスチャン家庭に生まれたこともあって、自分は神様のことを知っていると思っていました。クリスチャンの家庭出身者によくあることですが、聖書の話聞いても、「はいはい、知ってる知ってる」、「どうせこういう結論でしょ？はい、やっぱりー」みたいな態度でした。しかし、憐れみ深い神は何度も何度も問いかけてくださいました。あなたは本当に創造主を知っているのか。本当に理解しているのか。そんなわけはありません。全然知らない。この方はどういう方なんだと驚かされ、また創造主なる神を改めて覚えさせられることが多くありました。

この方を心に留めるとき、私たちはこの現実を見つめることができるのです。空しさを味わうことができるのです。

なぜなら、あなたを造られ、あなたを愛し、あなたの存在そのものを喜ばれ、それゆえに御子イエス・キリストを十字架に架け、よみがえらせ、そして私たち一人一人に聖霊さまを注いでくださった神は、どんなことがあろうとも、死を越えるときも、あなたを決して離れず、あなたを捨てない。

だから、安心して、私たちは空しさを味わうことができ、今与えられている日常の小さな喜びを、将来の不安を越えて、喜ぶことができる。いや、存分に喜ぼう。「あなたの若い時に楽しみ」と語られているのです。

教会は、この世界のむなしさと、向き合い、それを味わいつつ、それでも輝く小さな喜びがあると、若い日に創造主を覚えることの幸いを、喜びを伝えるのです。空しさのなかでも、教会を通して、聖書を通して、イエス・キリストを通して、創造主と出会い続けるのです。創造主を覚え続けるのです。

これが、キリスト者に与えられた創造主なる神の豊かな恵みです。この素晴らしい神を、「若い日」に、今、「覚えて」、心にしっかりととどめて、今週一週間もそれぞれの場所に、安心して、遣わされていこうではありませんか。

お祈りしましょう。